

東京女子大学

理事長 原田明夫 殿

学 長 湊 晶子 殿

2008年6月13日

川 田 伸 紘

東京女子大学東寮・体育館建築物についての要望書

(2)

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

昨年6月22日付で多くの建築関係者の賛同署名簿を添付して「東京女子大学東寮・体育館建築物についての要望書」を差し上げました。その主旨は、貴学旧東寮並びに体育館は近代建築史的に非常に貴重な建造物であり、多数のレーモンド建築が群的に存在し、かつ実際に活用されている姿は世界的にも類例がないので、保存の道も可能性として考えるべきであり、ましてやその解体にはもっと慎重ななければならない、ということでした。これは今もなお繰り返しても繰り返し切れない思いで一杯です。

これに対し、貴下方からは同年7月3日付でこれへの回答の書面をいただきました。そして間もなく旧東寮は解体工事が着手され、今ではその姿を目にすることは出来なくなってしまいました。続いて旧体育館もやがては同じ道が辿られることになっている、と伝え聞いています。

広い前庭を介して正門から中央に遠望できる本館には完成後の貴学整備計画の全体模型が展示されています。そこに立ち私は、いわば既定の解体を目前に、まだ残されているレーモンド設計の体育館建物は何ゆえに解体されなければならないのか、とその展示物を眺めながら考え込まざるを得ません。

貴学の計画は、旧体育館の撤去後のそのスペースを以って、正門側に設けられているシンボリックな前庭、これはある意味では表向きの広場・スペースとも言えますが、これに対してこれとは異なるところの内なる学生向きの広場・スペースを確保しようとするところに根ざしているように思われます。

私もその目的・意図は重々理解するところではありますが、その反面これはキャンパス計画の手法上、デザイン上の課題でもあると思っています。つまり、価値ある建物を必ずしも取り壊さなければ、これは絶対的に実現できないような目標ではない、と理解し確信しています。否、むしろ草創時からの貴学やレーモンドの設計意図は、この体育館を単に体育教育等のためにのみあてがおうとしたのではなく、大学に集う広範な人々の交流の場として位置付けていたことを振り返るならば、今目標としている学生等の集う広場・スペースのまさに中心に位置づけられてもおかしくは無いほどです。それを解体して、集いのためのスペースを確保するなど言うことは、私にはまさに本末転倒の観や危惧が感じられさえます。この全体計画が適切であるかどうか、貴学は将来的にみても問われ続けざるを得ません。

以上を鑑み、再度ながら私は以下の要望並びに質問を行ないたいと思います。

記

1. 昨年7月3日付けの貴学からの回答文書の末尾には、私たちの要望に沿えず残念であるとしつつ、「写真、図面、記念プレート、関係記録等の整理と個室の保存を行ない、旧東寮を末永く記憶にとどめることを計画しております」と書かれていました。
既に旧東寮が失われて相応の期間が経過していますが、その計画に向けた動きはどのように具体化していますか。
また、それらの成果をどのように管理され、どのように広く一般に公開される予定でしょうか。
2. 旧体育館建築物の解体計画は、上に述べた観点なども踏まえて、延期もしくは一時凍結し、キャンパスの全体計画の適正な見直しをするなどして、その保存・活用・再生の道を含めた検討を是非再び行なっていただきたいと思います。
3. 以上の要望と質問にご回答ください。

以上

末尾ながら、既に失われた旧東寮に無念の思いを抱き、旧体育館の保存を願う多くの声はますます貴学の内外から聞かれます。

ひとたび解体してしまえば、如何に記録的な保存（これは最低限必要な行為ですが）に努めようと、後にこの価値や意義をいくら唱えてももはや取り返しのつくところではありません。

貴学は先の回答書では両建築物を解体しなければならない理由として、教育環境の整備と並んで敷地の制約、財政上の理由を掲げていました。教育環境の整備はどの大学もがこれからも存続してゆけるかどうかを賭けて必死な努力をしています。また、敷地の制約や財政上の諸問題は前者の課題にどのように立ち向かうかの問題と不可分ではありますが、外形的投資に走り過ぎればその矛盾は深まらざるを得ないことも自明な事実です。諸問題を物的な整備や投資、解決手法に頼り過ぎることなく、建学の精神・草創期の方々からの思想を絶やすことなく、さらにはそのようにして培われ形成されてきた伝統と歴史をましてや軽んじることの無い叡慮が働かれることを切に祈っています。

敬具